

金城哲夫の生涯

- 1938年 ●7月5日、東京にて出生 中学までは実家のある沖縄で過ごす
- 1955年 17歳 ●中学卒業と同時に上京し、玉川学園高等部入学 学生時代から特撮の神様といわれた円谷英二特技監督の主催する円谷特技研究所に参加 東宝の特撮映画等の脚本で知られる関沢新一氏に師事する
- 1961年 23歳 ●玉川大学卒業
- 1962年 24歳 ●TBSのドラマ『純愛』シリーズ「絆」(監督・円谷一)でシナリオ作家デビューをする 一旦帰沖し、沖縄の役者を使って映画『吉屋チルー物語』を自主制作(脚本・監督)する <放送作品> テレビドラマ『純愛シリーズ』「絆」(脚本)…東京放送
- 1963年 25歳 ●4月に正式発足した円谷プロダクションの企画文芸室長となり同プロに在籍しながら、ドラマ『沖繩物語』のパイロット版製作のため帰沖する <放送作品> テレビシリーズ『沖繩物語』三部作の製作(灘千造氏と共同、未放送) <上映作品> 自主映画『吉屋チルー物語』(製作・脚本・監督)…沖縄映画制作所
- 1964年 26歳 ●『いまに見ておれ』の共同脚本などの仕事を手がける(ここで金城は関沢氏の次に脚本の師と仰ぐ生田直親氏と出会い、出演者の青島幸男氏とも懇意になる) ●フジテレビ・円谷プロ共同制作の『WoO』の企画立案に参加。同作品は諸事情で頓挫するも、同年にTBS・円谷プロ制作の『アンバランス』(後の『ウルトラQ』)に円谷プロ側の企画者として参加。脚本も数本手がける <放送作品> テレビドラマ『月曜日の男』『ペン先のレクイエム(鎮魂歌)』(脚本)…東京放送 テレビドラマ『こんなにあえて』(生田直親氏と共同脚本)…東京放送 テレビ映画『いまに見ておれ』シリーズ(脚本)…東京放送、国際放映
- 1966年 28歳 ●1月に『ウルトラQ』放映後、『ウルトラマン』の企画・脚本、『快獣ブースカ』の構成・脚本、松竹版『泣いてたまるか』の脚本他、シードドラマの脚本を担当、当時のバラエティ番組にもゲスト出演した <放送作品> テレビ映画『ウルトラQ』(脚本)…東京放送、円谷プロ テレビ映画『ウルトラマン』(脚本)…東京放送、円谷プロ <放送作品> テレビ映画『泣いてたまるか』『翼あれれば』(脚本)…東京放送、松竹テレビ部 テレビ映画『快獣ブースカ』(脚本)…日本テレビ、円谷プロ、東宝 テレビ映画『ウルトラセブン』(脚本)…東京放送、円谷プロ <放送作品> テレビ映画『マイティジャック』『爆破指令』(脚本)…フジテレビ、円谷プロ テレビ映画『戦え!マイティジャック』(脚本)…フジテレビ、円谷プロ テレビ映画『怪奇大作戦』(脚本、主題歌作詞)…東京放送、円谷プロ
- 1969年 31歳 ●円谷プロを退社して、故郷に戻った金城哲夫は、実家の勤続き料亭を手伝いながら若き尚巴志を主人公にした『佐敷の暴れん坊』をはじめとした数本の沖縄芝居の脚本を執筆した。また、琉球放送(RBC)にて、ラジオやテレビ番組の構成も担当し同時にキャスターとしても活躍した <上演作品> 沖縄芝居『佐敷の暴れん坊』(脚本、演出)…那覇劇場(初演) <放送作品> テレビ映画『帰ってきたウルトラマン』『毒ガキ怪獣出現』(脚本)…東京放送、円谷プロ <上演作品> 沖縄芝居『一人豊見城』(脚本、演出)…那覇市民会館(初演) <上演作品> 沖縄芝居『治気賢ハリー異聞』(脚本、演出)…琉球新報ホール(初演) <上演作品> 沖縄芝居『風雲琉球処分前夜』(脚本、演出)…琉球新報ホール(初演)
- 1970年 32歳 ●沖縄のラジオ番組の司会に多数出演の他ラジオドラマの脚本も手掛ける。また、東宝映画用のノンブシを共同執筆した(実現せず)
- 1971年 33歳 ●テレビドラマ『走れ!ケ-100』(C.A.L製作)「沖縄の巻三部作」の現地コーディネーターおよび出演した <上演作品> 沖縄芝居『虎!北へ走る』(脚本、演出)…琉球新報ホール(初演)
- 1972年 34歳 ●東宝より依頼を受けて、沖縄国際海洋博覧会の式典の演出や沖縄館で上映される映画にも携わり、広報としてテレビ番組『11PM』などへも出演した <上演作品> 沖縄芝居『王女(うみないひ)の恋』(脚本)…那覇市民会館(初演) <上映作品> 沖縄海洋博・沖縄館映画『かりゆしの島沖縄』(監督/吉田憲二、脚本/助監督・金城)
- 1973年 35歳 ●26日、不慮の事故にて37歳の若さで世界。内地でも当時の新聞やテレビ雑誌にて報じられ、日本中のファンから、その早過ぎる死が惜しまれた。
- 2006年 <放送作品> ハイビジョンテレビ映画『生物彗星WoO』(円谷英二と共同にての原案)…NHK、円谷プロ

金城哲夫資料館

金城の生家である南風原町の料亭「松風苑」では、金城の書斎を資料館として希望者に公開しています。

資料館には、当時、金城が使っていた机・書籍・資料等が残されていて、執筆に打ち込んでいた金城の姿がしのばれるようになっています。

机の上には、関係者やファンからの贈り物、沢山のウルトラマンや怪獣のフィギュアが置かれています。

円谷プロ時代の台本や帰郷後の沖縄芝居の資料等も展示され、壁には、特撮ファンならおなじみの俳優・スタッフのサインがずらりと並んでいます。かつてウルトラマンシリーズを共に制作した多くの仲間が資料館を訪れて、早すぎた金城の死を悼みました。



金城の生家である南風原町の料亭「松風苑」



「松風苑」敷地内の書斎



「訪れてみたい日本のアニメ聖地88」認定!

認定プレートと御朱印スタンプが、松風苑のカウンターに設置されています。金城哲夫資料館を訪れた記念に、是非、ご朱印を押してみてください☆



【見学申し込みについて】

常時公開はしていないので、あらかじめ電話で予約をお願いします。生家のご好意で保存され、ファンのために公開されている施設なので、失礼のないようマナーを守ってご見学ください。

お問合せ

金城哲夫資料館(松風苑)
TEL.098-889-3471

営業時間

11:30~17:00(要予約)
【定休日】年末年始

料金

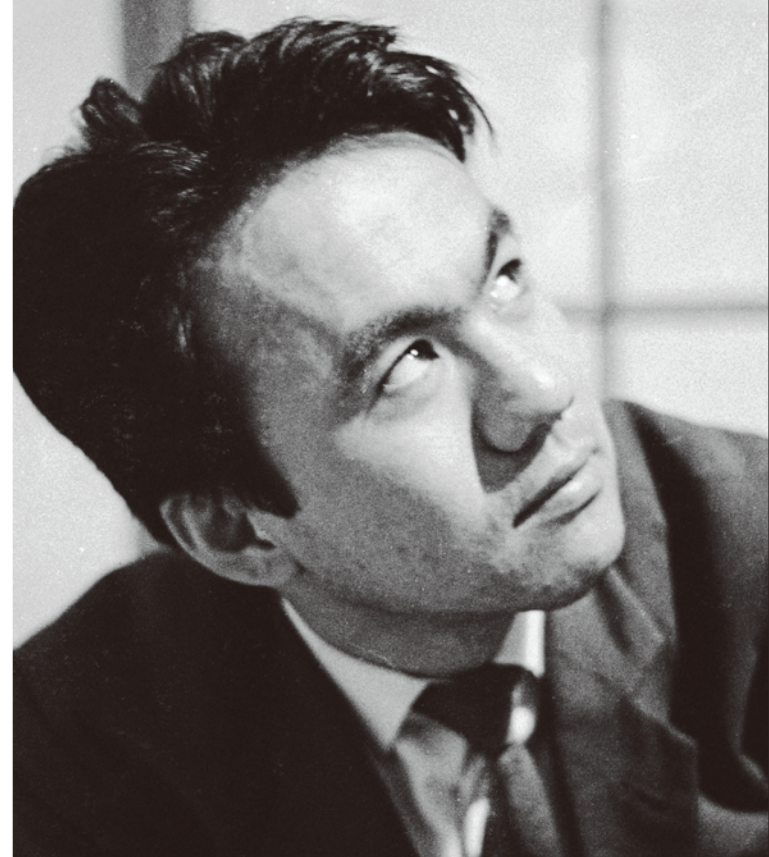
無料

駐車場

35台収容/大型バス可



※那覇空港より約20分



脚本家 金城哲夫

きん じょう てつ お

知ってた? ウルトラマン を創った南風原人がいた事を!

は え ば るんちゅ

発行 / 一般社団法人 南風原町観光協会 (2019年)
沖縄県島尻郡南風原町字本部158
098-851-7273・FAX:098-851-7109
メール / chiiki-machidukuri@haebaru-kankou.jp
HP / https://www.haebaru-kankou.jp/
協力 / 松風苑、(株)円谷プロダクション
金城哲夫研究会、(学)玉川学園、
(一社)アニメツurisム協会、
ウルトラマンの脚本家 金城哲夫のふるさと
南風原町住民会議



ウルトラマン ©円谷プロ

金城哲夫

(1938年7月5日ー1976年2月26日)

沖縄県南風原町出身の脚本家『ウルトラQ』『ウルトラマン』『ウルトラセブン』等、円谷プロ初期の特撮テレビ番組のメインライターとして大きな役割を果たしました。沖縄芝居の脚本、テレビ・ラジオの司会、沖縄国際海洋博覧会セレモニーの企画・演出などでも活躍しました。

南風原町で育ち、東京で番組制作に関わる。幼少時～高校・大学時代

生地は東京ですが、生後すぐ親とともに帰郷して、沖縄県の南風原町で子供時代を過ごします。6歳のときに沖縄戦を体験しました。

中学卒業後に上京し、高校・大学は玉川学園で学びます。

高校生生の時に「日金友好協会」なる金星の研究をするSFクラブを結成しました。「玉川学園沖縄慰問隊」を友人たちと組織して総勢17名の高校生でアメリカ統治時代の沖縄を訪問したこともあります。この当時からリーダーシップと行動力を発揮していました。



玉川学園沖縄慰問隊の一行(琉球政府前にて)左端が金城

円谷英二との出会い。映画『吉屋チルー物語』の制作

大学3年生のころ「特撮の神様」と呼ばれた円谷英二との出会いがあり、円谷氏の主催する研究所に参加しました。1961年ごろからテレビ番組の脚本づくり・企画づくりに関わり始めました。

その後一時的に沖縄に戻り、沖縄の役者を使った映画『吉屋チルー物語』を自主制作し、1963年に完成させます。1963年4月、設立されたばかりの円谷プロに入社しました。



Life of Tetsuo Kinio

ウルトラマンシリーズが大ヒット

円谷プロの企画文芸室長になった金城は、ウルトラシリーズ等の番組で、スタッフのアイデア等を取り入れながら、企画書のほとんどをまとめあげました。テーマ、物語の方向性、ウルトラマン・怪獣・登場人物の設定等、金城が創りあげた路線で制作されました。

円谷英二の「ヒーローを宇宙人にしたい」や、「もっと怪獣を増やしたら」といったスタッフの意見を活かしながら、次々と夢のあふれる物語を仕上げていきました。



金城が使用していた台本



ウルトラセブン ©円谷プロ

監督・脚本家・デザイナーなどのまとめ役に

円谷プロの企画文芸室の長として、ウルトラマンシリーズ制作の中核メンバーとして活動しました。円谷英二監督やTBSのプロデューサーからもなくてはならない人物として信頼を集めていました。

シリーズの企画概要を多くの脚本家に説明してプロット(物語の梗概)を寄せてもらい、それをもとにどんなエピソードを実際に制作していくかを考えるシリーズ構成者としての役割を担い、自身でも脚本を書きました。

毎回登場する怪獣についての特徴、ネーミングなどについても積極的にアイデアを出し、時には怪獣のデザインにも自身や脚本家たちのアイデアを伝えるパイプ役を務め、バラエティに富むウルトラマンシリーズの魅力の構築に尽力しました。

沖縄にゆかりある怪獣をちょこっと紹介!

エリ巻恐竜「ジラース」(『ウルトラマン』第10話「謎の恐竜基地」に登場) 沖縄の方言で「ジラー=次郎 スー=お父さん」 『次郎お父さん』(=次郎主)を意味する言葉です。



ジラース ©円谷プロ

魅力あふれる脚本を数多く書き上げました

忙しい日々の中、金城自身も多くの脚本を書きました。金城達の作品は「怪獣ブーム」「ウルトラブーム」と呼ばれ社会現象をまき起こしました。シリーズ放映時には、テレビを見るため銭湯から子供たちの姿が消える時まで言われました。

沖縄へ帰郷

『ウルトラセブン』の終了後は、『マイティジャック』『怪奇大作戦』等を手掛けましたが、番組の視聴率は低下、円谷プロ経営悪化と問題が起きました。

1967年、大城立裕氏が『カクテルパーティー』で芥川賞を受賞した事に感化された金城は、沖縄を題材にした小説を書きたいと、思いがつのようになりました。また「本土復帰を沖縄の地で迎えたい」という願いもあり、1969年に円谷プロを退社しました。

沖縄芝居やテレビ・ラジオなどで活躍

沖縄へ帰郷後、ふるさとの文化や歴史を猛勉強し、沖縄芝居の劇団の座付作者になり、実家のすきやき料亭を手伝いながら、脚本執筆にはげみました。



琉球王朝を築いた若き尚巴志を描いた『佐敷の暴れん坊』等を執筆し、本土の演劇要素を取り入れた新しいスタイルの沖縄芝居として役者達にも影響を与えました。

琉球放送(RBC)にて金城は、ラジオドラマの執筆、ラジオの『トヨタモーニングパトロール』のキャスターやテレビ番組の司会等もつとめました。



沖縄国際海洋博覧会のセレモニーに関わる

1975~1976年に開催された沖縄国際海洋博覧会のセレモニーの企画・演出も担当しました。金城が考えた演出は、世界七つの海から汲んできた海水を博覧会会場に設置された一つの入れ物に注ぐという内容でした。

沖縄から世界へ発信する海洋博覧会セレモニーの舞台上で、人類は海で一つにつながっているというメッセージを打ち出しました。

希望に向かって燃焼し続けた金城哲夫

平和を願い、沖縄国際海洋博覧会の演出に熱を入れる等、金城は仕事に奮闘していました。

また、「沖縄を題材にした物語を書きたい」と希望も強く、構想をノートにつづっていましたが、過度の飲酒で体調に影響をきたし、葛藤と悩みが激しくなっていました。体調悪化の最中も、金城は執筆の手をゆるめず、書き続けていました。

1976年2月23日、酔った状態で2階の書斎へ窓から入ろうとし転落、3日後の26日に脳挫傷のため37歳でこの世を去りました。

金城哲夫は、誰も思いつかないような斬新な発想、豊かなSF的素養、人情やユーモアを取り入れた物語で、日本中の人々の心をつかむ作品を数多く残した人でした。

